

# 土木屋の読書と旅 (14)

令和3年7月

## 【備忘録】

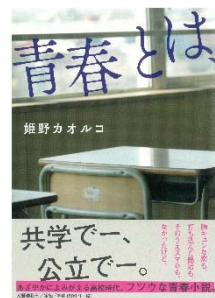
忘れたときのために必要なことを書きとめておくノート。メモ。

(角川必携・国語辞典)

65歳を過ぎると記憶メモリーの呼び出しに時間がかかることが多くなったが、今年に入って書き留めた自身の備忘録に類似の傾向が現れていることに気がついた。

【1月】 『未来しかなかった高校時代と、その未来の大部分が過去になってしまった今。……自分の生育体験からしか物が見えず、その狭さな視野だけで発想するしかなかった高校時代』

\* 姫野カオルコ(1958年生まれ)の『青春とは、』(文藝春秋)への新聞書評(評者・大矢博子)。帯には『共学で～、公立で～。胸キュンな恋も、打込んだ部活も、そのうեսマホもなかったけど。あざやかによみがえる高校時代。フツウな青春小説』とある。



【4月】 『……大事なことは、記憶を言葉にして、記録として残す、ということなんだ』

\* 福岡伸一(1959年生まれの生物学者：『生物と無生物の間』『動的平衡』)の新・ドリトル先生物語、新聞小説の連載(4月7日)の一節。近著に『福岡伸一、西田哲学を読む～生命をめぐる思索の旅』

【6月】 『表紙に <十八歳の日の記録 昭和二十年四月ヨリ 一若き日は過ぎ去り易い けれども多彩であり、豊かなる収穫がある。 それ故に、”若き日“は尊い> と記されたノート』

\* 2019年に91歳で亡くなった作家田辺聖子さんの終戦前後の日記が見つかった旨の新聞記事。

\* \* \*

元来、私に日記を書く習慣はない。小学校のとき、夏休みの宿題で絵日記を書かされたという記憶はあるが全くもって身につかなかった。家の中にじっとしているというタイプではなく、友達と一緒に近隣の未開地探検に熱中していた。ただし、家にテレビが来たのが小学4年生の頃であったこと(\*1)もあり、雨天時対策として学校の図書室や友達の家にあった全集(\*2)の本はよく読んでいた。

\*1 当時のテレビ放送で強く記憶に残っているのは、初めての衛星中継でケネディ大統領暗殺事件が画像の乱れとともに報道されたこと

\*2 当時高度成長期の波は地方部にも広がりつつあり、明らかな所得の上昇を背景に出版業界の巧妙な販売戦略によって〇〇文学全集や△△百科事典を狭い応接間に飾ることが流行った。私が通ったのは農村部の小学校であったのでそのような家は少なかった。私の親友に教育熱心な公務員の家の子がいて、そこには見栄のための全集ではなく、今思えば教育的配慮の行き届いた全集があった。オレンジ色がかかった赤い布張り装丁の岩波少年少女文学全集。『エミールと探偵たち』など夢中で読んだ記憶がある。

外出自粛の影響ではないだろうが、何十年も前の記憶がふと思い浮かぶことがある。「大事なことは、記憶を言葉にして、記録として残す、ということ」と今になっていわれても私には後の祭りである。ただし、全くすべがないわけではない。私の卒業した高校には二人の先輩(現役の作家)がいる。困ったときの先輩頼みではないが、ここでは彼らの作品の力を借りて私の青年(中学・高校)時代を断片的に追憶してみる。

\* \* \*

『男女の校舎は別棟になっていた。……新築にもかかわらず、どことなく殺風景で女子生徒が囚人館

## 土木屋の読書と旅 (14)

令和3年7月

と呼んでいる男子校舎の平たい屋根から「長髪を勝ちとろう」の垂れ幕が下がり、閉じられた硝子窓の上ではためいていた。木造二階建ての女子校舎は、長年日にさらされて白く変色こそしているものの、……、古びた長屋という感じで三棟が平行して建っている。校舎のすぐ西は、……かつてはその場所に馬場と厩舎があった。さらにそのはずれから標高百メートル足らずのK山が、西陽をはやばやと呑みこまんと濃紺の屏風となって立ちはだかっている。……瀬戸内海に面した平らな市街地のほぼ中央にぼつんと盛り上がったこの小山のせいで、ちょうど東の裾野に張りつくように建っている校舎は、夕方になるとたちまち山陰のなかにとりこまれてしまうのだ。



(高木のぶ子「光抱く友よ」より)』

高木のぶ子は1946年4月生れ、1984年『光抱く友よ』で芥川賞。最近では『小説伊勢物語 業平』がベストセラーとなった。7学年先輩になる。もちろんお会いしたことはない。

私の母校は「防高（ぼうこう）」、運動グラウンドを共有する隣の高校は「防商（ぼうしょう）」と地元では呼び慣らされている。大学に入学後、友達から出身校を聞かれ「防高」というと変な顔をされた記憶が今でも残っている。かれには「ぼうこう」＝膀胱のイメージが湧くらしい。慣れとは恐ろしいもので私にとっては「防府」を“ぼうふ BOUHU”と呼ばれることに違和感がある。周防の国の国府で“ぼうふ（濁点なし）”である、少年期に受けた義務教育の賜物である。

もう一つ大学時代に友達から不思議がられたことがある。私自身、高校に入学するまで「防高」は男女共学であることに一点の疑いも持っていなかった、つまりメンバーは変わるものの中学同様のクラス編成であると信じ切っていた。しかし現実と同じ敷地内に男子校舎（鉄筋コンクリート建て）と女子校舎（木造建て）が間に特殊教室（理科室等）を挟んだうえで、さらに渡り廊下を介して繋がるという、「男女共学」というよりも「男女併学」というのが実態の高校であった。関西の友人にはこれが珍しかったらしく、“男女七歳にして席を同じうせず（礼記：らいぎ）”さすが長州の高校は違うといわれたことを記憶している。では生徒達はこの「男女併学」問題にどう対応するのか。もっとも安易な方法は文化系の部活（クラブ活動）に参加することである。私は中学時代の1年上のマドンナ先輩に誘われて、運動部からの強い勧誘を蹴って新聞部に入り、放課後はいつも部室で癖の強いメンバーとたわいのない話に明け暮れた。また、国語の教師が顧問の古典同好会が結成され、正月行事として教師宅で“かるた会（百人一首）”が開かれるとの情報を得た男子クラスでは、一番真面目な優等生が先頭に立って参加者を募集し、男子5、6名で積極参加することとなった。正月に百人一首を楽しむような家柄でない私は、古典の副教材を引っ張り出して一夜漬けて70首覚えたところでタイムアップとなったが、どうゆうわけか優勝してしまった。目的が明確であれば人は想定以上の能力を発揮するものではある。

引用文中の「標高百メートル足らずのK山」とは「桑山（くわのやま）標高108m」のことであり、私は中学・高校時代を桑山周辺で過ごしたことになる。桑山には山頂に来目皇子（くめのおうじ）\*3の墓があり、山裾には望東尼（ぼうとうに）\*4の墓もあるという由緒ある場所である。

\*3 来目皇子は聖徳太子の弟であり、推古10年征新羅将軍として征途についたが翌年筑紫において没し、天皇は周防の娑婆（佐波）に土師連（はじのむらじ）を派遣し桑山の頂上に葬ったとされる。山頂から南をみると遠くに古代からの主要海路である周防灘がみえる。市南部は歴史的に干拓地であるから昔はもっと山近くまで瀬戸内海が迫っていた可能性は高い。母校桑山中学校の

# 土木屋の読書と旅（14）

令和3年7月

校歌には「来目皇子」と「望東尼」が1番、3番の歌詞にでてくる。

- \*4 野村望東尼は西郷隆盛や高杉晋作など勤王の志士と親交があった幕末の歌人。有名な逸話に“病床の高杉が「面白きこともなき世を面白く」と上の句を詠んで、望東尼が「すみなすものは心なりけり」と下の句を詠むと、高杉が「面白いのう」といって笑った”というものである。望東尼終焉の地は防府市三田尻本町。

私の入学時に「長髪を勝ちとろう」の垂れ幕があったかどうかは記憶がないが、2年生のとき長髪が許されたのは先輩たちの奮闘のおかげである。ただし、いわゆる長髪が許されたのではなく、坊主頭からリクルートカットへ基準が緩和されただけのことではあるが、男子はいかにしてグループサウンズのような髪にできるのか、指導教師との涙ぐましい戦いを続けた。

\* \* \*

『海流はそびえる大きな樹に似ている。樹木が大地の力を太い幹からいくつもの枝に伝え、鳥や虫たちに恩恵を与える果実や葉をつくるように、海流は多くの支流に分かれ、やがてたどり着いた海辺の土地に豊かな恵みをもたらす。……はるか南の海原で生まれた黒潮は東シナ海を北上し、南西諸島の沖合で日本海流と対馬海流のふた手にわかれ……朝鮮半島の南端でふたたびわかれ、……本州と九州の狭い海の関へ押し寄せる。そこが……関門海峡である。やがて潮勢が緩やかにかわると、……内海のやさしさに抱かれる。周防灘である。周防灘の北岸に、ふたつの岬にかこまれたちいさな港町があった。海からその町を訪れるものは、堤防のむこうに白煙を吹きあげる煙突群を見上げて、敗戦から十年足らずで復興したこの町の勢いに感心する。しかし船が少しずつ港の奥へ入ると、河口にへばりつくようにトタン屋根の家々が立ち並ぶ異様な光景を目の当たりにして、口ごもる。やがて前方に、古い二本の橋でつながれた中洲があらわれる。……「遊んでゆきいよ」と遊郭の女が声をかける。……あらためて周囲を見渡すと潮の香りはさまざまな人間の匂いに変わっていて、そこが流れ着いた人たちの溜まり場のような境界であることに気づく。

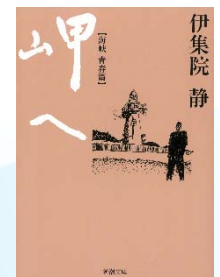
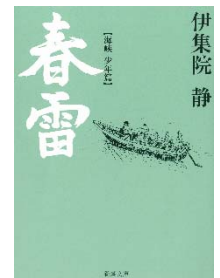
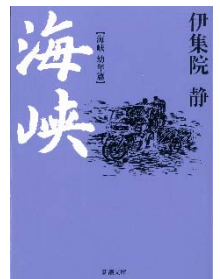
（伊集院静「海峡」より）

伊集院静は1950年2月生まれ、1992年『受け月』で直木賞。中学・高校の4学年先輩である。ということは中学、高校と同時期に同じ学校にいたことはないが、弟とは中学・高校時代の仲の良い友人だった（高校3年夏、明日から夏休みという1学期終業式の日には海に遊びに行き帰らぬ人となった）ので幾度か顔を見たことはある。

『海峡』『春雷』『岬へ』の3部作は文庫本化にあたって、幼年篇、少年篇、青春篇のサブタイトルが付け加えられたように彼の自伝的小説（私の友人 M.N 君は、主人公英雄の弟「正雄」の名前で登場する）であり、私にとっては貴重な備忘録である。この小説を読めば、当時の「三田尻」が持つ活力、人間社会の有り様、何よりも記憶に残る幾人かの教師像が私のイメージと重なり、共同幻視できるからである。

私には、この小説がエンターテインメント型の教養小説〔近代小説のひとつ。主人公の思想の発展や人間的成長などを中心にえがいた小説。ビルドゥングスroman。ゲーテの「ウィルヘルム・マイスター」など。（角川必携国語辞典）〕に思えてならない。

話を分かりやすくするため、まず防府市の町の構造を説明したい。町は宮市（門前町）と三田尻（港町）のふたつの中心地区を萩往還で結ぶ形を基本に市街地が形成され、戦後は国鉄駅周辺が商業地とし



# 土木屋の読書と旅 (14)

令和3年7月

て発展してきた。この国鉄駅の駅名は昭和37年までは三田尻駅であった。当時の町中の中学校は、市街地部では南北の区分を山陽本線、東西を駅北では萩往還、駅南では鐘紡工場へ至る産業道路を概ねの境界＝校区界として佐波中、国府中、桑中に3分割されていた。地方の中小都市の分際でおこがましいが佐波中・国府中が”山の手”の中学校、桑中が”下町”の中学校のイメージであった。桑山の東・山麓に「防高」、西・山麓に「桑中」があり、北・山麓が「防府市役所」である。そして、多感期の桑中時代が描かれるのが『春雷』、回想として防高時代が挿入されているのが『岬へ』である。

『その生徒が担任教師に連れられて教室にあらわれたとき、クラス全員が目を瞞って、教壇の上の少年をまじまじと見つめた。異様に身体の痩せた少年だった。彫りの深い面立ちが褐色に日に焼けて眼光だけが鋭く光っている。…「今度、私たちのクラスと一緒に勉強することになった藤本太郎君だ。藤本君は、これまで中米にあるドミニカという国へ家族と移民をしていたのですが、今回事情があって日本へ帰国した。皆仲良くするように。」… (『春雷』より)』

『…新聞なんて当てにならないからな。俺の友だちにドミニカへ行って帰って来た家族がいるけど、新聞に載った“南の楽園”という政府の謳い文句に家や土地を売って移民したのに、石ころだらけの島だったんだって。その友達は日射病を患って、身体がおかしくなって帰って来たんだよ。(『岬へ』より)』

小学校(華城)4年だったと思うが、ドミニカ共和国からの帰国少女が転入してきた。日本語に慣れるという意味があったと思うが、短期間で1年生から始めてあつという間に同学年になった。クリっとした目のソバカスのある明るい子で、小説に登場する「藤本君(仮名)」の妹である。兄さんはひよろ長くていつもここにこしているやさしい人だった。近所の市営引揚者住宅に住んでいた。当時盛んだった子供会活動でよくいっしょに遊んだが、1年早く桑中へ進級した、つまり一つ年上だった。私が中学へ進学すると彼女はソフトボール部で活躍しており、よく声をかけてくれた。

『「さっき三田尻からの電話で、正雄が富海の海岸で行方がわからなくなったといってきたの」…「…正雄は今朝、富海の海の家で貸しボートを借りて海へ出たというの。それで午後になって、片方の魯だけが残ったボートが浜に流れ着いたそうなの…」』『七日目は早朝から、正雄の同級生とサッカー部員が五十人近く浜へ集まった。英雄の野球部の後輩も加文先生と手伝いに来てくれた。加文先生の指導で彼等は水着に着替えて、背丈の立つ水域を手を繋いで探索してくれた。…八日目も早朝から探索が続いた。正雄を探そうとする同級生たちの数が増えていた。「正雄さんは人気があるんですね。やさしい性格ですから……。友情というものはたいしたものです」浜を探索する生徒たちを見て源造が言った。』『翌日は朝から蝉の声が聞こえ、まぶしいほどの青空の下で葬儀がはじまった。同級生たちの涙に送られ、正雄は華羽山の山腹から一条の白い煙となって、空へ昇って行った。(『岬へ』より)』



同級生と手を繋ぎ、胸の深さまで海に入ってM君を探した。こういうかたちで高校最後の夏がはじまるとは思ってもいなかった。

\* \* \*

自宅にいる時間が長くなり、ぼんやりと見ていたTV番組「旅サラダ」6/19で吉幾三が歌っていた。

亡き友よ もう一度／お前の顔 見たい／あの頃の 笑い顔／あの時の 泣いた顔／

陽が沈む 三陸(富海)の／ ああ海憎し …… (吉幾三『忘れない…』より) 古谷 健